令和4年度 奈良県立畝傍高等学校全日制課程 学校評価総括表

【高等学校用】

年度	令和4年度（中期計画1年目）
本校の使命 （スクール・ミッション）	知・徳・体の調和がとれ、自律的・創造的でグローバルな視野をもった、次代を切り拓くリーダーの育成
年度重点目標	1 自己理解や他者との関わりをとおして、コミュニケーション力の向上を図る。 2 社会の一員としての自覚を促し、他者と協働する能力を養う。 3 探究的な学びをとおして、主体的に物事を考える習慣や論理的な思考力を養う。 4 自分の夢や将来を見据えた進路を設定する力を養い、その実現に向けて弛まず挑戦する強い意志を育てる。

1 スクール・ポリシーの内容

教育方針（スクール・ポリシー）	入学者の受け入れに関する方針 （アドミッション・ポリシー）	本校では、以下のような生徒を受け入れます。 1 本校の使命や教育方針を理解し、自らを鍛える意欲のある生徒 2 基礎的な学力が身についており、学ぶ意欲の高い生徒 3 自ら学び、自ら考え、自ら行動しようとする姿勢を備えた生徒 4 人間尊重の精神をもち、自らの使命を理解して社会に貢献する意欲のある生徒
	教育課程の編成及び実施に関する方針 （カリキュラム・ポリシー）	本校では、本校の使命（スクール・ミッション）を実現するため、以下のとおり教育課程を編成・実施します。 1 生徒が自らの興味や関心、個性に応じた学びを実現することが可能なカリキュラムを編成します。 2 生徒が物事を俯瞰し多角的に考える習慣や、論理的な思考力を身につけられるよう、探究的な学びを中核とした学校設定科目を開設し、未来志向の教育活動を展開します。 3 生徒が社会のグローバル化の進展に対応できるよう、語学力やプレゼンテーション力等を養う教育プログラムを実施します。 4 開かれた学校として、外部の有識者や研究機関、企業等の協力を得、実社会の課題に即した教育プログラムを実施します。 5 生徒が生涯にわたって健やかな生活を送れるよう、自らの健康・安全を保持する知識・技能や体力を育成します。 6 生徒が協働・自治の精神や規範意識を身につけられるよう、自ら学校行事等の諸活動を企画・運営する機会を創出します。
	育成を目指す資質・能力に関する方針 （グラデュエーション・ポリシー）	本校では、校訓である「至誠、至善、堅忍、力行」の精神を涵養し、以下の資質・能力を身につけた生徒を育成します。 1 心の誠実さ、人としての善良さを、何ものにもまして大切にすることができる。 2 探究心をもち、目標が達成されることを信じて挑戦し、粘り強く努力し続けることができる。 3 グローバルな視野をもち、自らの社会的使命・役割を理解して積極的に行動することができる。 4 高い教養、深い思考、豊かな想像力を身につけ、新しい社会を切り拓こうとする気概をもつ。

２　奈良県教育振興基本計画（「奈良の学び推進プラン」）が示す各テーマごとの学校教育目標

自己評価、学校関係者評価の基準
Ａ：十分達成できている
Ｂ：概ね達成できている
Ｃ：不十分である

テーマ	学校の教育活動に関する目標（Ａ）	計画期間における具体的目標（Ｂ）	令和４年度末の目標値等（Ｃ）	令和４年度末の状況（Ｄ） ①いつ、どのように取り組んだか　②取組の成果	自己評価（Ｅ）	学校関係者評価（Ｆ）	改善方策
１．こころと身体を子どもの成長に合わせてはぐくむ	生徒の健康課題（メンタルヘルス）を踏まえた健康教育の充実	生徒との個人面談を年３回以上実施する。 スクールカウンセリング制度のさらなる周知を行う。	保健だより及び電子掲示板を活用したスクールカウンセリングの紹介と啓発 月１回以上	【第１学年】 ①HR。②個人面談等を通じ生徒の学習状況把握、類型選択相談等を行うため、スクールカウンセリングの紹介と啓発を月１回以上行った。 【第2学年】 ①定期考査後や類型科目登録前以外にも、日々、様子に変化等があれば面談を実施するとともに、保護者と連携した。また、保健だよりのリラックス法の実施、スクールカウンセリングの紹介、相談できる機関一覧表の掲示等も行った。②自分なりの課題を見つめなおし、学習などに前向きに取り組む姿勢が見られた。成績向上につながった。学校の全職員で生徒を見守ることができたと感じる。 【第3学年】 ①生徒との個人面談を各学期毎に１回以上、２学期は特に複数回実施し、生徒の進路実現のサポートを行うと共に、メンタル面でも注意深く見守った。②生徒が目標に向かって前向きに取り組む手助けができた。年度後半はスクールカウンセリングを受ける生徒はいなかった。 【生徒指導】 ①定期的に健康課題（メンタルヘルス）を踏まえた内容の保健だよりを発行した。②電子掲示板を活用してスクールカウンセリングの紹介を啓発を定期的に行えた。	A A A A	A	どの学年においても、教員が生徒と向き合う時間を確保することを継続する。学校生活に不安を抱える生徒に継続した声かけをしたり、クラスの仲間同士が親睦を深める楽しさを実感できる学級活動を行ったりすることで、メンタル面でしんどくなる生徒への理解をこれまで以上に深め、教師と生徒が心を開いて話せる関係作りをする。
	こころの充実と体力・運動能力の向上	体育授業での基礎体力の向上を進める。 運動部活動での基礎体力の向上を進める。	体力テストにおける総合評価が全国平均以上	【保健体育部】 ①新体力テストを実施。②奈良県平均は全国平均を下回るが、学校全体をとおして総合評価は全国平均を上回っている。ただし唯一３年生の男子は奈良県平均は上回っているものの全国平均を1.42ポイント下回った。	A	A	引き続き、体育の授業や運動部活動での基礎体力の向上を進める。
	望ましい生活習慣の確立	睡眠時間の少ない生徒への生活習慣の改善指導を行う。	睡眠時間の改善(睡眠時間６時間未満の人数減少)	【保健体育部】 ①睡眠時間のアンケートを実施。②R3年度は1年生47名34.3%、2年生51名30.5%、3年生50名28.6%、R4年度は1年生35名19.6%、2年生56名34.8%、3年生68名41.5%で昨年度より6時間未満の生徒が増えた。 【生徒指導部】 ①保健だよりや掲示物等で睡眠の大切さを発信した。②不注意による遅刻が年間５回以上の生徒に遅刻者集会を行い、改善を求めた。	B A	A	来年度は保健の授業においても、生徒に睡眠や体力・食事について大切さを伝える。

テーマ	学校の教育活動に関する目標（A）	計画期間における具体的目標（B）	令和４年度末の目標値等（C）	令和４年度末の状況（D） ①いつ、どのように取り組んだか　②取組の成果	自己評価（E）	学校関係者評価（F）	改善方策
２．学ぶ力、考える力、探究する力をはぐくむ	各教科での探究型学習の充実	シラバスの中に探究的な取組を明記することで、教員と生徒それぞれが学習の方向性と計画の理解を深める。 課外の講演等への積極的な参加を促す。	生徒の授業評価での満足度平均75%以上 エンパワーメントプログラム等への参加者30人以上	【第1学年】 ①課外活動。②エンパワーメントプログラム1年生参加者42名、その他外部講師講演に積極的に参加した。 【第2学年】 ①ICT機器や電子黒板を利用したり、単なる知識の習得にとどまらないように思考する時間を多く取り入れたりする授業を展開。校内外の講座等は、内容も含め何度も紹介し参加を促した。②課外の講演等は、部活動や講習の実施日と重なることが多く、毎回多数参加しているとは言い難いが、参加した生徒は講座終了後にも多く質問をするなど、普段とは異なる気づきや学びを得ている。 【第3学年】 ①大学入学共通テスト等への対策とも連動して、授業や進学講習の中で探究的な取り組みを取り入れるなどの工夫をした。大学や研究機関の講演等をできる限り紹介し、積極的な参加を促した。②十分に探究型学習を取り入れることはできなかったが、疑問を持ち考えようとする姿勢は育ったと思われる。課外への講演等への参加はコロナ禍以来、少ないままである。 【教務部】 ①各授業の中で、生徒自ら考え、主体的に取り組むことができる内容を展開している。1学期末と2学期末に生徒対象に授業アンケートを実施し、2学期には「授業改善のための授業見学」として、他の先生方の授業見学の研修を行った。また、1・2年生の生徒にエンパワーメントプログラムへの参加を促した。②生徒の授業アンケートの結果として、80%以上の生徒が満足している。また、エンパワーメントプログラムにも42名の生徒が参加した。	B A B A	A	今後も、生徒たちが自主的に学び、考え、探究していけるような授業を構築する。また、課外の講演等への参加の意識づけと参加しやすくなるよう、日程の調整を行う。 授業改善のために教員が互いにもっと多くの授業を見学できるような工夫をする。
	ICTを活用した教育の推進	各科目でICT機器を使った授業を必ず行う。	授業やHRにおけるICT活用率70%以上 教員の情報活用能力70%以上	【第1学年】 ①授業及びHR。②１年生では毎時Chromebookや電子黒板を使用した授業を実施した。HRや授業で議論の際に個人端末を活用した。 【教務部】 ①学校行事やＨＲ、また出停・欠席者に対するオンライン授業など、100%のHR教室でICT機器を活用した。 ②1年生の教室に電子黒板が入っているので、ほとんどの授業やＨＲ等で活用されている。教員の情報活用能力は、89.7%。	A B	B	授業で生徒の個人端末を活用するよう、さらなる工夫を行う。 もっと多くの教員が授業でICTが効果的に活用できるように、研修などを実施する。
	新教科「グローバル探究」の研究・推進	２年生課題研究の取組を深める。また、先行実施の１年生の取組を進めていく。	課題研究についての生徒の満足度 70%以上	【第1学年】 ①授業及びHR。②各授業にて探究的な活動を実施、探究HRでは課題研究の基礎的な内容を学び、3回の外部講師講演から探究テーマ設定のヒントを得た。 【第2学年】 ①課題研究に取り組み方や姿勢を逐次説明。毎時間の課題研究の時間には、一人一人との対話を大切にし、生徒の考える力を引き出すことができるよう努力した。②自分の興味・関心があることからテーマを決め、熱心に、また楽しんで取り組む姿勢が見られた。一方、自分で思考し、アイディアを出すということが苦手な生徒は、研究内容も浅いものに留まっている。 【教育企画部】 ①生徒主体の「探究」を支える体制が整いつつある。②第２学年の「課題研究」において、各生徒が「面白い」と思える研究課題に出会うまでの過程を重視できる環境になりつつある。	B B B	B	課題研究・理数探究での生徒の活動補助のあり方の工夫と検討を行う。 探究において大切にしていることを教員と生徒が共有できるように、適切な伴走と教員間のていねいな打合せを行う。 「課題研究」に限らない、あらゆる場面での探究的なものの考え方や見方の積み重ねが、生徒に浸透していくようなさらなる仕組みを作る。

テーマ	学校の教育活動に関する目標（A）	計画期間における具体的目標（B）	令和４年度末の目標値等（C）	令和４年度末の状況（D） ①いつ、どのように取り組んだか　②取組の成果	自己評価（E）	学校関係者評価（F）	改善方策
３．働く意欲と働く力をはぐくむ	探究型学習の発展型としての生徒のキャリア意識の醸成	課題研究の取組で学術内容に興味を深め、進路について考える。 深い学びを活かし、共通テストに対応していく。	課題研究での学術的な研究の促進 共通テスト平均得点率68%以上 第1志望を貫く生徒の増加	【進路指導部】 ①各模擬試験の分析をより具体化し、講習や生徒自身の復習等で活用しやすくした。全学年で1学期に志望校調査を実施した。②共通テスト平均得点率は文型で66.4%、理型で66.7%であった。3年生の第1志望維持率は昨年度が71.7%、今年度が72.0%（全統模試5月、11月比較）であった。 【教育企画部】 ①研究テーマを設定する際に、進路について考える機会になっていると回答した生徒が約40%いる。②研究課題が現時点で学術に貢献できるものはまだ少ないが、生徒の興味・関心のスタートが学術の入り口になっている生徒もいる。	B B	B	模擬試験のより効果的な活用法を研究する。類型や生徒の状況に応じて、基礎基本を定着させるための講習のあり方を検討する。 大学等への進学後に専門的に学ぶ意欲につながるよう、「課題研究」に取り組む中で、有識者へつなぐといった教員のサポート体制を構築する。
	企業人や学識経験者による出前講義の充実	生徒の積極的な参加を促す。	出前講義年間10回以上	【教育企画部】 ①外部講師を招聘した出前講義は12回実施し、分野や地域を問わず多くの方々のご協力を得ることができた。②それぞれの分野の「ほんもの」に出会うことで、豊かな気づきを得ている生徒も多い。	B	A	課外に実施する場合の生徒への周知・参加の促進については、日程調整など学年や他分掌とも連携をとりながら、より多くの生徒が参加できるように企画する。
	キャリア教育の充実	多くの生徒がインターンシップ、アカデミック・インターンシップへの参加するように生徒に勧めていく。	インターンシップ、アカデミック・インターンシップへの参加者15人以上	【進路指導部】 ①キャリアサポートセンターから案内のあったインターンシップについて案内し、参加を促した。②夏期休業中と冬期休業中にのべ7名参加した。	B	B	大学でのインターンシップや公開授業等についても情報を集め、長期休業期間等を利用し参加を呼びかける。
４．地域と協働して活躍する人を育てる	コミュニティ・スクールの運営	学校運営協議会を立ち上げ、少なくとも年２回実施する。	学校運営協議会の開催 年3回	【教頭】 ①第1回7月12日(火)会則、教育方針、学校評価、教科書採択、学習指導・進路指導・生徒指導、研究開発学校事業についての審議。第2回11月10日(火)授業参観、生徒による授業アンケート結果を基に授業について協議。第3回3月6日(月)学校評価について審議。②学校運営協議会の初年度であるので、委員の方々に学校の取組を知っていただくような内容とした。活発な審議をいただき、関心と期待を持っていただいている。	B	B	学校の取組が地域に開かれるよう、委員の方々の関心や助言を具体的な取組につなげられるよう考える。
	海外留学や国際交流の促進	各種、留学支援情報の案内を行う。 国内での代替プログラムの案内を行う。	海外への留学生（短期も含め）５人以上	【教育企画部】 ①今年度、海外への留学生はゼロ名であった。また第２学年対象の国内での代替プログラムについては十分に生徒を集められず、実施には至らなかった。②インド総領事や、アメリカ大使館より外交官を招聘した出前講座等、新たな視点を得る機会については創出できた。	B	B	「海外で」学ぶイメージを持ちづらい状況下で、生徒の参加を促進できるかを引き続き探る。
	地域との協働の推進	部活動・家庭クラブでの取組を拡充する。	部活動・家庭クラブを中心とした地域連携活動年４回以上	【特別活動部】 ①1、2学期末考査最終日にJR畝傍駅・近鉄八木駅の周辺から学校までの通学路清掃を実施した。音楽部、吹奏楽部の演奏会へのご案内を行った。②地域住民の方々より感謝の言葉をいただいたり、演奏会に足を運んでいただいたりしている。また、「3年生にエールを送る会」の花火の実施に伴い、地域住民の方々の了解を得るため、連絡を密に取ったことで、交流を深めることができた。	B	A	コロナで中止していた活動を少しずつ復活させる。
５．地域で個性が輝く環境と仕組みをつくる	人権教育の充実	人権を確かめ合う日の取組を増やす。	人権を確かめあう日の取組　年10回	【人権教育部】 ①「人権を確かめあう日」「熱れ」の取組を年間13回行った。人権学習HRのほかに、生徒向け４回、保護者向け1回の人権講演会を実施するとともに、職員研修は年間２回行った。また、保護者・教員がともに参加する高人教主催の研修会にも参加した。②生徒・教員・保護者に対して、様々な人権課題について考える機会を設けることができた。	A	A	学校を取り巻く状況の変化に応じ、取組内容を見直し精選する必要がある。
	学校いじめ防止基本方針に基づく取組の推進	教師一人一人が生徒のわずかなサインもキャッチするために、定期的なアンケート及び面談を実施する。	基本方針の点検・見直し 年1回以上	【生徒指導部】 ①いじめアンケートを年２回実施。②必要に応じて担任等との連携を密にし、いじめを許さない、見逃さない取り組みを行えた。	A	A	定期的なアンケートの活用及び面談を継続させながら、教員にささいな事でも相談できる雰囲気づくりをより高めていく。
	教育相談及び特別支援教育の充実	職員研修を年１回以上実施する。	職員研修を年１回以上実施	【生徒指導部】 ①教育相談及び特別支援教育の充実のための職員研修を年２回実施。②生徒理解、共通理解を深める取り組みを行えた。	A	A	生徒の状況把握と、先生方の取組の成果を共有できるような研修を進める。

３ 評価結果の分析、今後の改善方策等

令和4年度末の目標値（C）は概ね達成できた。
年度末に実施した課題研究におけるアンケートでは、生徒の満足度（12の項目について肯定的な回答をした生徒の割合）は87.4%、1学期末に実施した保護者アンケートでは、「畝傍高校に通わせてよかった」95.9%と、高い評価を得られた。